

1. はじめに～読書支援の捉えなおし

本の選択は利用者本人にある。受動的な利用者がいたとしてもその本が利用者の気持ちから切り離され提供されるものではない。図書館は、「利用者自身が本を選ぶ」重要性を認識し、読書の自立を支援する、教育的な機能を持つ機関である。読書支援の意義とは、利用者が自主的に本を探し、本に出会い、読書を通じて人生を豊かに生きるための力を身につけることにある。図書館サービスの根幹にある貸し出し、レファレンスサービス、読書案内、利用教育などを推進するためには、生きる土台として読書の自立が欠かせないと考える。

2. 研究目的

読書に対して主体的な意識を醸成するために有効な「宍道式読書プログラム」を提案する。「宍道式読書プログラム」とは、宍道勉氏（元鳥取短期大学司書課程教員）が自分で考案し講義で実践した複数の読書法を総称した呼び名として筆者がつけた仮の名称である。今回の論考化にあたり「宍道式読書プログラム」の使用については了承を得ている。

宍道式読書プログラムは自分の思考を巡らし OPAC を使わずに脳内に関くインスピレーションを頼りに閲覧室の書棚から本を選び取る。そのあとグループ内に戻り本を紹介しあう。代表的なものに、「レファレンスごっこ^{1),2)}」（自分の脳内辞書を使い意味を考えインスピレーションをもとに読みたい本を自分で選ぶ）、「どんぐりと山猫裁判～“読みたくない”本の裁判³⁾」（全員が検察官や裁判官になって読みたくない本を裁判する）、「注文の多い図書館⁴⁾」（各自がシェフ、コックとなり本の創作料理を作る）、「わからない、しかし面白い本を選ぶ」（自分にとって難しい苦手だが面白い本を選ぶ）などがある。

宍道が読書法を考案するきっかけは、司書教諭講習会の講義内容を検討する際に、教師自身が図書館を使いこなせていない現状を反省的にとらえ、将来司書教諭になる教師がまず図書館を使いそこで自主的な学びの経験が重要であるとの認識にあったようである⁵⁾。図書館を使い児童生徒が自主的な学びをする、これが宍道の読書法を貫く理念といえよう⁶⁾。宍道式読書プログラムは主体的な思考を深化させていくプロセスを用意する。

本研究は、読書の自立を演出する読書支援の意義に注目し、対話と内省のプロセスを経て利用者が自ら本に出会い本を選ぶ力を身につける読書支援の有効性を明らかにする。そうして、大人も子どもも読書を楽しむもの、読書は生きる上で欠かせないものとの認識を持ち、人々の自立した社会生活を期待する。

なお、本研究において「内省」とは、「自己の経験や他者との意見交換をきっかけに、自己の思考や行為の枠組みを反省的に問い直し自己内での意味づけを変える」と定義する。

3. 研究方法

3.1. 調査対象とデータ収集

ここでは筆者の所属する大学で 2018 年および 2019 年に試みたものに限定し、宍道から提供されたプログラムを紹介する。授業の講師は宍道が担当し記録は筆者がおこなった。

調査対象は、北海道武蔵女子短期大学の図書館司書課程を履修する 1 年生および 2 年生とし授業の最後にアンケート用紙を配布し一週間後に回収した。2018 年のアンケートは自由記述式とし、自分が得て学んだ気持ちを 400 字以上にまとめてもらった。2019 年も記述式ではあるが、4 項目の柱を立てそれぞれ 100 字以上の自由記述とした。それらをすべて一つにまとめデータ分析を行った。調査日、読書プログラム名、調査・回収人数は下記のとおりである。

①2018 年 6 月 29 日「レファレンスごっこ」1 年生 (33 名)

「レファレンスごっこ」とは、利用者（住民、児童生徒、学生）が司書になりテーマに関連する図書を見つけ提供する「ごっこあそび」である。

②2018 年 6 月 29 日「わからない、しかし面白い本を選ぶ」2 年生 (37 名)

「わからない、しかし面白い本」とは奇妙な組み合わせのように感じるかもしれないが、宍道によれば、難しい本も面白い本も、そう思うのは利用者本人の「内面」にあるもので、「わからない、しかし面白い本を選ぶ」とは、自身の思考を深めて内面に入り込むことを意味する⁷⁾。

③2019 年 6 月 7 日「レファレンスごっこ」1 年生 (34 名)

④2019 年 6 月 7 日「ゼロ弾きのゴーシュはなぜ上手くなったか？」2 年生 (24 名)

この読書プログラムではまず宮沢賢治『ゼロ弾きのゴーシュ』を読む。主人公であるゴーシュ以外の登場人物、楽長、三毛猫、かっこう、狸の子、野ネズミ親子たちがゴーシュをどのように励まし、叱り指導しているかについて、作品の中で使われている「レトリック（修辞）」に注目させ、読み解き、自分のインスピレーションを膨らませ、その後の本探しにつなげていく⁸⁾。

3.2. 分析方法

宍道式読書プログラムに参加した学生の学びの深化を探るためには一人ひとりの気づきや内省に焦点を当てるべきとの判断にたち、人間の行動と予測の説明に優れた内容であり社会的な実践的な場に活用されるための理論といわれている修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach 以下 M-GTA という）を用い分析を試みた⁹⁾。

M-GTA はデータを解釈する際、まず、分析テーマと分析焦点者の二つの視点を設定する¹⁰⁾。本研究では、分析テーマを、「学生が自主的に本を探し、本に出会う経験、また他者の解釈を知り本の世界を共有するコミュニケーションを通して、学生の心にどのような内省が行われているのかを明らかにする」と設定する。分析焦点者は、「レファレンスごっこ」、「わからない、しかし面白い本を選ぶ」、「ゼロ弾きのゴーシュはなぜ上手くなったか？」を受講した本学図書館司書課程の学

生（1年生および2年生）」と設定する。

4. 分析結果

4.1. 概念とカテゴリーの生成

M-GTA はデータに密着して解釈を試みる方法であり、データに密着した解釈から独自の概念を生成し、この概念を最小単位として統合的に構成を図る手法をとる¹¹⁾。概念と概念の関係をみながら概念のまとまりであるカテゴリーを生成したのち、カテゴリーとカテゴリーの比較やレベルに注目しながら全体的なうごきを結果図（要綱では省略）にまとめていく。

分析焦点者である本学図書館司書課程の学生（1年生および2年生）の振り返りアンケート（自由記述）の分析をもとに、21個の概念、8個のサブカテゴリー、3個のカテゴリーを生成した（表1）。

4.2. 読書の意味を問う内省のプロセス

学生個人の行動と意識の変化、他者との意見交換による意味の編みなおしなど、学生の内省の全体像について、カテゴリー別に具体例を挙げながら説明する。カテゴリーは【○○○】（隅付き括弧）、サブカテゴリー

ーは<○○○>（山括弧）、概念は○○○（波線）で示す。

4.2.1 【自己の経験】

①<本を探す不安と戸惑い>

学生は探索の拠りどころとなる OPAC が使えないため広い図書館でどのように探せばいいのか苦労する。

「宍道式読書プログラム」では OPAC を使用しない。OPAC を使用せずに自分が OPAC になる「ごっこあそび」をする。学生自ら閲覧室の書架を回り、インスピレーションに合う本を探し選ぶ。学生は普段、OPAC を使い検索結果の情報をもとに本を入手している。だが宍道式読書プログラムは OPAC に依存できない。学生は不安を抱えたまま本探しを始める。そもそも自分のひらめきで本を探せと言われても経験のない学生が多い。そのため本選びの過程では、どのような本を選ぶのがいいのか、本を探すことに戸惑いを覚える。

・いつも本を探す時には、OPAC を利用して本を見つけていたので今回は分類しか頼るものがなく、広い図書館で本を探し出すことは簡単ではないことを知り、OPAC の有難さを改めて感じた。(91020)

表1 概念とカテゴリー

カテゴリー/サブカテゴリー	概念名	定義	
自己の経験	本を探す不安と戸惑い	OPAC に依存できない	OPAC を使用せずに本を探すとすると、頼るものがなく、どうしたらよいか、不安に感じる。
		本を探すことに戸惑い	OPAC 検索を使いヒットした本を探すのではなく、自分の考えを頼りに本を探し選ぶのは難しい。
	予想外の本に出会う	いつもとは違う棚に行き本に出会う	普段は行かない棚に行きそこで思ってもみなかった本を見つけ、新鮮かつ楽しい出会いが生まれたと好意的にとらえる。
		OPAC からは得られない本に出会う	OPAC に頼らず自分のインスピレーションに従えば結果、OPAC 検索では得られない本に出会える。
	見つけた本に興味持つ	偶然見つけた本に興味を抱く	偶然見つけた本の概要を知り、読んでみたくなる。
		「わからない本」は読みたい本に変わる	難しい本は敬遠していたが、実際に本を手にとると、その本に関心がわき読んでみたいと思う。
	本を選ぶ意味を問う	本に出会う喜び	棚を自由にめぐる楽しさ、新しい本との出会い、そして想像通りの本を探し出せた時の喜び、達成感が得られる。
自分の中で本の探し方、選び方が変化		OPAC 検索より新鮮かつ興味を覚える本に出会える方法を発見する。	
本に出会う意味		OPAC で本を入手するよりもいろいろな本に出会い、楽しく新しい知識に触れ、考えながら本を選ぶ意味を考える。	
他者と交流	他者の考え方を知る	同じ言葉でも解釈は人により異なる	ある「ことば」（例えば「あそび」）について意味を考えたとき、自分が考える意味と他人が考える意味とでは違いがある。
		本を選ぶ基準、観点は人により違う	人は自分の興味や関心をもとにイメージを膨らませているため、選ぶ本も選んだ理由も人により異なる。
	他者の考え方を知る	グループ内の意見交換を通じて自分にはない他者の考え方に触れ、相手の価値観をみとめる。	
	他者の本に出会う	選ぶ本は皆異なる	同じお題であってもその人のうちに持つイメージやインスピレーションが違うため、人それぞれ異なる本を選ぶ。
		交流を通じて本に出会う	グループ内で本を紹介しあうのは、自分にはない他者の考え方に触れ、また他者の紹介する本に出会う。
他人が紹介する本に興味を持つ		自分は知らないが、他者は知っている本の世界を聞きながら本に興味がわく。	
読書の意味を問う	主体的な読書	避けていた本も読んでみよう	他者の意見を聞きながら、過去に難しかった本や最後まで読めなかった本、なんとなく避けていた本をもう一度読んでみよう、また手にとってみなければ中身はわからないのでいろいろな本に挑戦してみようという気持ちに変化する。
		思考を放棄しない	我々はベストセラーやいくつかの受賞作品の情報に影響を受けやすいが、思考を放棄せずに自分が読みたい本は自ら選ぶ。
		自分が本を選ぶ	本が面白いかどうかはその人の興味や関心に依るところが大きく、自分が読みたいと考える本選びが読書を楽しむものにする。
	司書は読書を支援	本との出会いが読書	本を一冊すべて読みきらなくても本に出会い、本を選ぶ楽しさを覚える。
		本との出会いを支援	レファレンスサービスは、利用者との良好な関係性をつくり、利用者が自分で本を選ぶようにする。
	司書は読書の楽しさを支援	司書は本と出会える楽しさを利用者に伝え、そのための仕組みを考える。	

・「あそび」というテーマで、自由に本を選ぶという作業は、すぐにそのテーマに合った本が見つかるだろうと思っていましたが、なんでもいといわれると逆にどの本がいいのか迷いました。(81030)

②<予想外の本に出会う>

OPAC は使用できないとなると頼れるのは自分しかない。本探しの主体は自分である。自己の解釈とグループ内での意見交換を経て、脳内にインスパイアされたもの、それが唯一、本探しのキー概念になる。学生は他からの情報を事前に持たずに本を探す不安を抱えたまま書棚をうろうろする。結果、いつもとは違う棚に行き本に出会う。本の背タイトルを眺めながらふっと感じた本に手を伸ばし目次や本文のページをめくる。しかも OPAC からは得られない本に出会う。自分のひらめきや思いつきが思いがけない本と出会わせてくれたのだとそれまでの不安な気持ちは影を潜め、新鮮な気持ち、そして楽しい気持ちが学生に芽生える。学生は思いがけなく偶然に見つけた本との出会いを「インスピレーション」の語源「息を吹き込まれたもの」を引用し、一冊の本との出会いに対して新しい息吹と表現する。

・普段はいかないような書架に行き、どんな本があるのか、どのような分野の本があるのか知ることができて、とても楽しかったです。(91029)

・OPAC を利用することなく自力で書架を巡ることで、自分の目的の棚だけでなく周辺の棚にも目を向けることができるので、その分広い視野で資料を探ることができると感じました。(91032)

③<見つけた本に興味持つ>

宍道式読書プログラムは、本を「正確に見つける」のが目的ではない。自己の脳内に起こるインスピレーションによる探索と本選びを大事にする。学生は書架でたまたま手にした本にもかかわらず偶然見つけた本に興味を抱く。その本の内容を見て読んでみたくなる。興味を覚える本との出会いは、新たな知識の誕生であり次なる興味・関心につながると考える。また学生は、難しく思えても本と向き合い理解しようとするところに意味があるのではないかと前向きにとらえる。向き合い方により「わからない、難しそう」は興味を覚える一冊になる。その本への関心と呼び起こし、面白さにつなげ、「わからない本」は読みたい本に変わる。それぞれの本に、興味・関心を持つ人が必ずおり、誰が読んでも面白くない本など存在しないのではないかと、面白いと決めるのは本を紐解く本人次第と考える。

・いつもは、検索をしてその本がある棚まで真っ直ぐ行っていたので、周りの本をぜんぜん見ていなかったのですが、自力で本を探し選ぶことで、一つ一つ本をじっくり見ることができ、読みたいと思う本がいくつか見つかったので良かったです。(91006)

・「わからない、しかし面白い本」を図書館へ足を運び自ら探したことで、新しい本と出会い、一見難しそうなお本でも少し触れてみると面白さを感じることができた。(略)「わからないけど面白そう」と考えて多くのものに触れることによって、自分の世界観が広がっていくのかもしれないと感じた。(82002)

④<本を選ぶ意味を問う>

学生はインスピレーションを頼りに書架を自由に回り、いろいろな本に出会い、さらには関連する新たな知識にも触れる。偶然手にした本に興味を覚え、本を見つられた達成感と本に出会う喜びを感じる。自分の中で本の探し方、選び方が変化する様子がうかがえる。学生は本に出会う意味について自身への問いを深

め、本を選ぶ重要性を認識する。

・OPAC を使わずに本を探すことについて私は、本当に自分の想像していた本を探すのにも苦勞もするし、時間もかかりましたが時分が想像していた本に出会えた時は、達成感もありものすごく楽しかったです。(91014)

・OPAC を使わないで自分で探し回ってみると、気になる本を見つられたし面白そうだなって思う本も多々あった。これは本との出会いだなって思う。(91001)

・様々な種類の本と自分のテーマとのかかわりについて考えながら探していくうちに、班のテーマであった「結ぶ」とは自分の中でどんな意味を持っているのか、自分が今見ている本の中には「結び」があるのか、など、テーマと本のどちらの考察も深められる機会になった。(91033)

4.2.2. 【他者と交流】

①<他者の考え方を知る>

同じ言葉でも解釈は人により異なる。例えば「あそび」では、人は自身の興味や関心をもとに自分の中のイメージを膨らませているため一人ひとり異なる考え方を示す。その違いは本の選択に表れる。学生は本を選ぶ基準、観点は人により違うため多様な本が持ち込まれたのだとグループ内の意見交換を通じて知る。自分にはない他者の考え方を発見の場になり、他者の考え方を受け止め紹介された本に興味を抱く。これらはテキストから得られるものではなく学生同士で話し合うがゆえに習得できる経験である。

・私は、野ネズミとの出会いを通してのゴーシュの「性格の変化」に着目して本を選びましたが、他の人は、ドラえもんに関する本や有名な芸能人の著書を選んでいて、それぞれ着目した箇所、解釈の仕方が違って、考え方は十人十色で本選びに正解はないのだなと感じました。(92022)

・本に対して持っている感想やイメージも違い、私なら選ばない本を選んでいて、人の本に対する感性は様々であると思う。同じお題のもとで、個人が考えて本を探し出すということの多様さを学ぶことができたと感じる。(82014)

②<他者の本に出会う>

学生は一つのテーマをグループ内に共有しその後本探しを始めるが他の人が選ぶ本は皆異なる事実を知る。学生は自分とは違う考えに触れ他者との交流を通じて本に出会う。学生は他人から本の紹介を受け自分は知らないが他人が知っている本の世界を知る。自分ではあまり読まない分野の本でも薦められると、面白そう、読んでみたい気持ちがわき起こり、他人が紹介する本に興味を持つ自分を発見する。また、難しそうではあるが手にとってみなければ中身はわからないので避けていた本を読んでみようかと前向きになる。

・「歌」という動詞から私は詩画集を選んだが、他のメンバーはアイドルについての本やアイヌ民族の文化に関する本などを選んでおり、種類が全く異なっていた。しかし話を聞くと、すべての本が違うポイントから「歌」に関わっていてすごいと思った。(91016)

・自分の読書観を見直すきっかけになったと思う。今まで無意識のうちに避けていた本に手を伸ばしてみても良いかなと感じた。読んでみれば面白かったということは少なくはない。逆に面白くない本のほうが少ないのかもしれない。(82028)

4.2.3. 【読書の意味を問う】

①<主体的な読書>

インターネット情報はわれわれの生活に欠かせない存在であり、本選びについても、ベストセラーや受賞作品の情報に影響されやすい。学生は自身の受動的な態度を見直し、思考を放棄しない気持ちを大切に思う。

自分の考えと他人の考え方の違いに触れ、それが選ばれる本の多様性につながる。と知る。「本との出会いが読書である」と今後の自分の本に対する向き合い方について思考を深める。

・近頃は読みやすいものばかりを手にとり、こうして考えて本を選んだのはいつぶりだったのだろうか。授業を通していくうちに、新鮮な気持ちになったのである。“考える行為”は、いま人間として生きているからこそできるものであり、放棄するなんてもったいない。強く実感させられた。(82008)

・今までは読書はそれなりの時間をとってする堅苦しいものだと思っていたが、本と出会うことが読書だととらえれば、本を読むのが苦手という人でも読書をしたことになるし、これからたくさんの本と出会うきっかけになり、本好きの人が増えると思った。(81015)

②<司書は読書を支援>

学生は宍道式読書プログラムに参加し自分に対し本に出会う意味を問う経験をする。司書が本当にすべきサービスは何であろうかと、本を提供する側にいる司書の専門的業務に視点を変える。レファレンスサービスとは、利用者に寄り添い良好な関係性をつくり、本との出会いを支援ではないかと考える。一方 OPAC だけに頼っているのは本との出会いを制限するのではないとも思う。OPAC に頼らずとも思いがけない本に巡り合えた経験を通して本の世界を楽しく広げる。学生は、司書は読書の楽しみを仕掛ける人であると専門性に思いを巡らす。

・私自身も一度図書館でレファレンスを受けたことがあるのですが、本さえ受け取ればいいだけだった私に対し、図書館司書の方は、本の探し方から難しい内容など、自分には必要のないことまで話してくるので、鬱陶しいと思ってしまうことがありました。しかし、その司書さんの行動こそが「レファレンス」であり、(略)司書の方は、次に本を借りに来た時、ある程度のところまで自分の力で探せるように、お願いされた本の探し方を説明しているのだと話してくださいました。(81018)

・人それぞれ違う感性があり、本を読む際にも感じ方は人それぞれなので、レファレンスの際にも利用者の感性をできるだけ尊重する必要があると感じました。(92011)

5. 考察

本研究では「学生が自主的に本を探し、本に出会う経験、また他者の解釈を知り本の世界を共有するコミュニケーションを通して、学生の心にどのような内省が行われているのかを明らかにする」と分析テーマを設定した。

宍道式読書プログラムは OPAC を使用しない。学生は自分のインスピレーションだけを頼りに本探しを始める。最初は不安を抱えているが苦勞の末に何とか本を選び取る。手にした本を紐解きながら「OPAC では得られない」と感じるほど新鮮な気持ちになり自分の力で納得する一冊を探し出せた達成感を得る。学生はグループでの意見交換を通じて、自分とは異なる解釈が人それぞれの脳内で行われ持ち寄った本はいろいろな分野から選ばれる事実を知る。他者が紹介する本に興味を覚え読んでみたいと思う本も見つかる。自分の考えとは異なる他者の考え方を知りその差異を内化し自分の中に取り込もうとする。

学生は読書プログラムの体験を通じて読書を支援する図書館側に視点を移し、人と本を結ぶ読書支援のあり方について思い描き読書の捉え方を変える。

以上の分析を通して宍道式読書プログラムには他者

や対象との相互作用を通じて自己を内省する反省的思考が起きており、利用者が読書において自立していくための有効なプログラムになり得ると主張する。

6. おわりに

最後に今後の課題を二点あげておく。まず宍道式読書プログラムを広範囲に実践していくことである。一昨年よりいくつかの公共図書館のイベントにおいて児童向け「レファレンスごっこ」を学生が進行役となり実践した。高校司書の研究会でも読書プログラムの紹介と演習をおこなった。また本学が主催する「図書館員のリカレントプログラム」の参加者の中には自館のイベントに読書プログラムを取り入れてくれた方もいる。今後も児童生徒、学生、社会人などに対象を広げ読書プログラムの普及を図る。次に読書の自立を検証し続けることである。読書支援の意義を、読書による生きる力の習得におき、複数の事例を検証し学びの理論化を目指す。

注・参考文献

- 1) 宍道勉「図書館利用者論～教育から啓蒙へ～」『図書館学』No. 103, p. 20-27. (司書教諭科目の受講生、小学5年生児童を対象に「レファレンスごっこ」の実践が紹介されている。)
- 2) 宍道勉「学校図書館が「生きる力」教育を救う」『人間と文化』2, 2019, p. 248-256.
- 3) 宍道勉・木村修一「読書指導への新しい試み:「読みたくない本」を課題とする授業実践から」『図書館学』No. 112, p. 9-17.
- 4) 宍道勉・天野佳代子「みんなで「注文の多い図書館」を!!～児童生徒が行うブックトーク～」『図書館学』No. 104, 2014, p. 11-18.
- 5) 宍道ほか「学校図書館における「図書館利用教育」で自主的な学びを考える-事典カードの導入-」『図書館学』101, p. 15-22.
- 6) 前掲4)
- 7) 2018年6月29日「情報サービス論」宍道作成・配布プリントより
- 8) 2019年6月7日「情報サービス論」宍道作成・学生配布プリントより
- 9) 木下康仁「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析手法」『富山大学看護学会誌』第6巻2号, 2007, p. 1-10.
- 10) 木下康仁『ライブ講義 M-GTA』弘文堂, 2007, 306p.
- 11) 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践: 質的研究の誘い』光文堂, 2003, 257p.